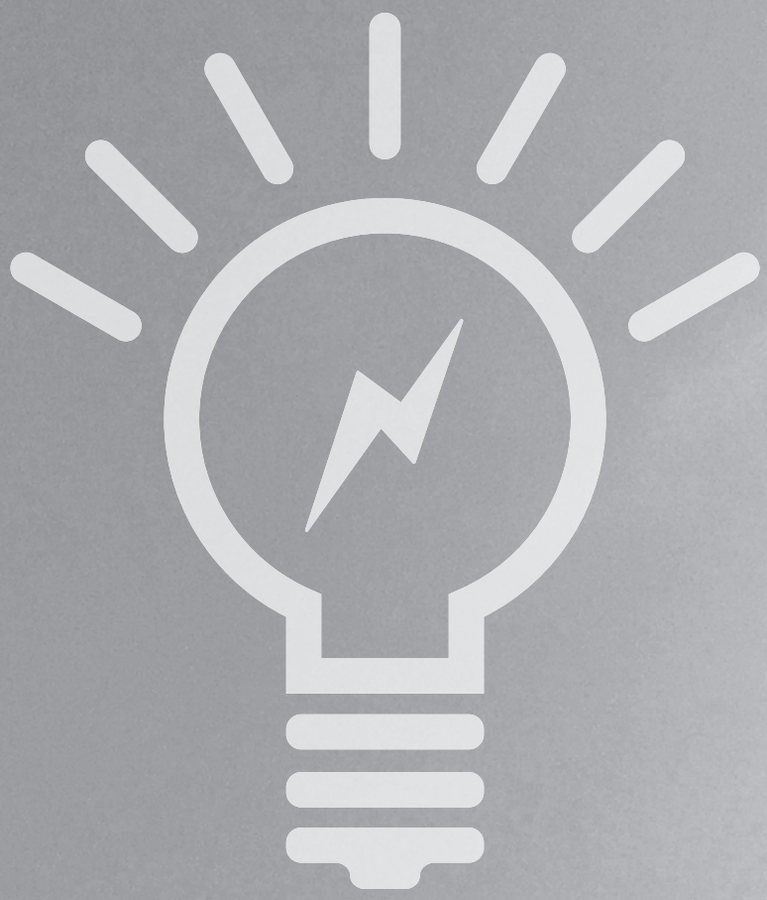
東北６県
ZEB、創エネ・省エネの建物



地球環境の保全が喫緊の課題となる中、脱炭素化への動きが世界的に本格化している。日本では、業務部門（事務所ビル、商業施設などの建物）からのCO2排出量が全体の約２割を占め、建築物におけるエネルギー消費量削減の重要性がますます高まっている。そこで、東北６県からZEB（ネット・ゼロ・エネルギー・ビル）、創エネ・省エネの建物をピックアップ。2050年のカーボンニュートラル実現を目指し、環境対応を強化した建物を紹介する。

東日本電気エンジニアリング

盛岡支社青森信号通信サービスセンター 青森電力サービスセンター

省エネ見える化で環境意識向上

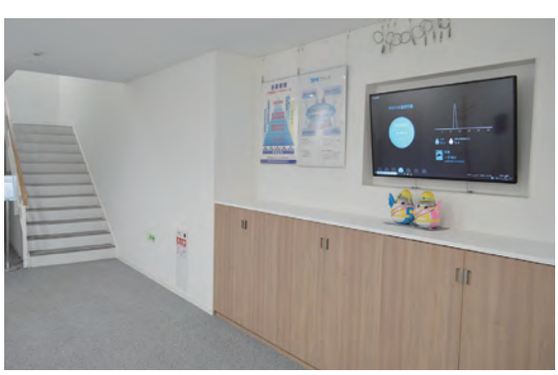
ＪＲ東日本の全エリアをはじめとする各鉄道事業者の電気設備メンテナンス、設備管理、設備工事を行っている東日本電気エンジニアリング（ＴＥＭＳ）。

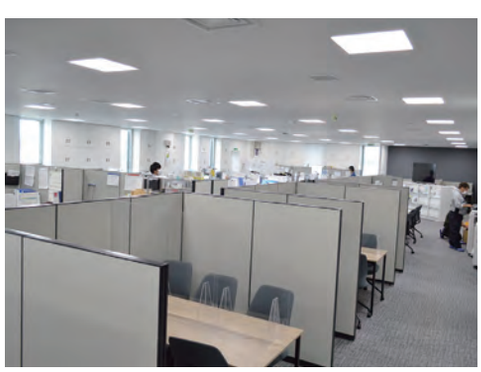
同社では、働きやすい環境づくりに力を注いでおり、支店や支社ビル、サービスセンター事務所の新築・整備を行う際にも、さまざまな改善を行っている。その一環として実施しているのがＺＥＢの実現で、社員の環境意識向上や地球環境保全への貢献にもつながるとして、積極的に取り組んでいる。

青森市にある同社の盛岡支社青森信号通信サービスセンター・青森電力サービスセンターもその一つで、今年３月に、これまでのサービスセンターの老朽・狭隘化改善へ移転新築することを機に、ＺＥＢを目指すことを決めた。

具体的には、建築面では外壁にロックウール断熱材、屋根にウレタンフォーム断熱材、窓にＬｏｗ－Ｅ複層ガラス（空気層）、設備面では、空調に外気取入れ量制御システム（ＣＯ２制御）、照明のＬＥＤ照明器具、人感・明るさ検知制御、タイムスケジュール制御、ゾーニング制御システムなどのさまざまな技術を導入。その結果、設計時の１次エネルギー消費量50%削減を達成し、「ＺＥＢ Ｒｅａｄｙ」（「ＺＥＢ」を見据えた先進建築物として、外皮の高断熱化および高効率な省エネルギー設備を備えた建築物）の評価を受け、建築物省エネルギー性能表示制度「ＢＥＬＳ」においても、５段階評価で最高ランクのファイブスターの認証を取得している。

実際に使用している立場として、青森信号通信サービスセンターの蝦名浩所長は施設について「玄関脇に電気や水道等の１次エネルギーの消費量が分かるモニターを設置し見える化させている」と説明。青森電力サービスセンターの千葉伸也所長は、「社員の省エネ意識向上や環境改善に役立つと期待している」と話している。


玄関脇のモニターで省エネを意識づけ


無線ＬＡＮ導入の事務所フロア

大船渡地区消防組合
大船渡消防署住田分署

木質バイオマス利用し エネルギーを地産地消

総面積の90％を森林が占め、林業と木材関連製造業が基幹産業の住田町。「森林・林業日本一」を目指している同町では、2014年に木造の庁舎が完成して以降、既存の公共建築物を順次、現代的な木造建造物に建て替える「木質の中心市街地」構想に沿ったまちづくりが進む。豊富な森林資源を活かし、木質バイオマスエネルギーなどの利用も推進している。

庁舎の隣接地に当たる同町世田米川向80の７地内に18年に竣工した「大船渡消防署住田分署」は、町産木材を利用した大きな庇がシンボル。車庫を含め全体に木造を用いた消防署は全国的にも珍しく、19年には第22回木材活用コンクール最優秀賞農林水産大臣賞、20年には日本建築学会作品選奨を受賞している。

設計はＳＡＬＨＡＵＳ一級建築士事務所、施工は佐武建設・住田住宅産業・山崎工業特定ＪＶが担当。分署棟はW造２階建て、延べ924.64㎡となる。

構造形式は、高い耐震性と耐震壁の無い間取りの自由度を実現するため「貫式木造ラーメン構造」を採用。接合部に金物を用いない伝統的な木造建築の技術を踏襲した。スギ、カラマツなど町・県産材を多く使用している。

接合部に金物を用いない伝統的な技術を踏襲

木質バイオマス熱源機

町内には町産材を用いたラミナ製材、集成材加工、プレカットの一連の工場があり、空調にはそこから排出された端材を加工したペレットを用いて木質バイオマス熱源機冷暖房を使用。エネルギーの地産地消を行っているほか、太陽光パネルの設置、自家発電機による補助電源の確保など自然エネルギーを積極的に活用している。

また、吹き抜けの車庫に面して配置された諸室はガラス張りのため、車庫内に採り込まれた光が床で反射し、居室へ採り入れられている。このほか大きな庇が日射しを制御することで建物寿命の向上も見込める。自然エネルギーの推進や環境と経済が好循環するまちづくりを進めている住田町。公民館、町営住宅などの整備にも木造を取り入れており、木質化を軸に地域資源を最大限に活用した持続可能なまちづくりを進めていく。

秋田市庁舎

地中熱利用で空調外気負荷を低減

秋田県の県都・秋田市の行政サービスの拠点である秋田市庁舎は2016年４月の竣工。気候が厳しい寒冷地に建つ施設でありながら、１次エネルギー消費量を従来型の施設に比べ50％以上削減した「ＺＥＢ Ｒｅａｄｙ」を達成しており、2019年度には、一般財団法人・建築環境・省エネルギー機構が隔年で募集しているサステナブル建築賞で理事長賞を受賞した。

施設はＲＣ造地下１階地上６階塔屋１階建て、延べ３万0980㎡。庁内に入ると印象的なのが、１階から最上階まで通じるゆったりとした吹き抜け空間「市民の座」だ。秋田県産の杉材を多用し、トップライトからは自然の光が降り注ぐ。熱だまりとなる空間を上部に十分に確保していることから、夏季はこれが熱の緩衝帯になり負荷を抑制、冬季はここから熱を回収する。

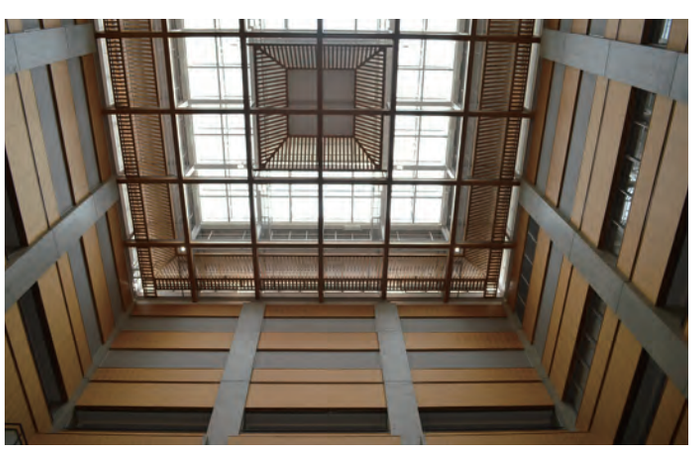
地下にある免震層はクールヒートトレンチとして活用しており、ここに外気を取り入れ、地中熱によって夏季は予冷、冬季は予熱して空調外気負荷を低減する。地中熱ヒートポンプも導入しており、空気熱源ヒートポンプや冷温水発生器と併用し、季節に応じて利用量を最適化している。

外周に配置されたルーバー

居住域空間には、全面床染み出し空調システムを採用。通常は風量が変わらないものが一般的だが風量調整が可能で、省エネ化に寄与している。足元からの暖房は、古くから快適な状態と言われる「頭寒足熱」（ずかんそくねつ）を実現し快適性が高く、冬場は厚着で庁舎を訪れると汗ばむほどだ。

外観を印象付ける、四周にぐるりと設けられたメンテナンスバルコニーにも大きな役割がある。日射制御の役割も兼ねており、雨に濡れない下部には杉材のルーバーが備わる。このルーバーは太陽の高度により日射遮蔽のほか、天井への導光の機能も果たす。

2019年度のサステナブル建築賞受賞の際は、直近1年間のエネルギー実績は862MJ／㎡・年、評価の対象外であるコンセント分を除くと499MJ/㎡･年。従来型の施設に比べると63.8％の削減を達成しており、ＣＡＳＢＥＥ（建築環境総合性能評価システム）はＳランクとなっている。


「市民の座」上部。日の光が差し込む

あかねヶ丘 ＹＯＮＥＫＩプレミアム

山形県内初、ＺＥＢの民間サ高住

山形県内で初めて国の補助金を得てＺＥＢ設備を配備した「あかねヶ丘　ＹＯＮＥＫＩプレミアム」（山形市）は、サービス付き高齢者住宅に保育所機能も有した民間福祉施設。建物はW一部Ｓ造２階建て、延べ2099㎡の規模で、2019年に竣工した（設計＝福蔵、施工＝小野建設）。家庭的感覚にこだわり、内装はホテルのようなデザインを採り入れたほか、高効率な設備を導入して、利用者が快適に過ごせる室内環境を提供している。

三菱電機が納入したＺＥＢ設備・システムは、定格冷房エネルギー消費率の区分を満たす高効率なルームエアコンや、供用部の空調を一括管理する集中コントローラーなどの空調設備、ＤＣブラシレスモーター搭載タイプのダクト用換気設備、人感センサーおよびタイムスケジュール制御による消し忘れ防止機能を導入した照明設備、かごと重りのバランス最適化に加え待機時の無駄な電力カットにより従来機種から大幅な省エネを実現した昇降機設備などがある。

一括して全室の温度を管理するパネル

さらには、創エネとして建物屋上に高出力モジュールと高効率パワーコンディショナの組み合わせによる太陽光発電設備も設置。10分ごとに経済産業省にデータを送って「見える化グラフ」を自動作成することにより省エネ分析・診断ができ、職員などの意識改善にも貢献できるＢＥＭＳ（ビルエネルギーマネジメントシステム）も配備した。これによって、ＺＥＢランクとしては１次エネルギー消費量50％以上の低減に位置付けされる「ＺＥＢ　Ｒｅａｄｙ」にカテゴライズされ、経営者にはランニングコストよし、利用者は365日快適な温度で過ごせる理想的な環境が形成される。職員は冬でも半袖Tシャツにカーディガンを羽織るだけで事足りるそうだ。

施設を管理するよねき（山形市）の米田謙代表取締役は「採択のハードルは高かった」と苦労を明かすが、入居者の『住み慣れた生活を楽しみながら、自分らしい暮らしを続けたい』という思いに応える信念が原動力となり、山形県内初のＺＥＢ化が実現した。

よねきの米田代表。コロナ前は月1～2組がＺＥＢの視察に訪れていたという

イノアックコーポレーション
築館工場事務所棟

自社製品の高い省エネ効果を実証

今年１月に「ＺＥＢ」の認証を取得したイノアックコーポレーション築館工場事務所棟（宮城県栗原市）。高い省エネ性能を実証するこの建物は、イノアック製品の地中熱交換パイプと高性能断熱材を採用している。自社製品による省エネの相乗効果に加え、太陽光発電設備の増設による創エネでエネルギー効率を向上させて、ＺＥＢの最高ランク取得を実現した。

2018年３月に完成した事務所棟（Ｓ造２階建て、延べ1221㎡）は、イノアック住環境の地中熱交換パイプ「Ｕ―ポリパイ」（宮城県・小牛田工場製造）と、同一敷地内の築館工場で製造する高性能断熱材「サーマックス」を導入し、イノアック製品の省エネ効果を体感できる事務所を目指して建設された。稼働後、初年度のエネルギー消費量を解析したところ、当初の想定以上に省エネ性能に優れていることが判明。ＺＥＢプランナーに診断を仰ぐと、太陽光発電設備の増設と、空調設備をダウンサイジングすることでＺＥＢ化できることが分かり、認定取得へと舵を切った。

地中熱交換器Ｕ―ポリパイ施工状況

この事務所棟のＺＥＢ化を支えた「Ｕ―ポリパイ」と「サーマックス」は、県内工場で生産しているいわば“宮城県産”製品。国内最多の施工実績がある地中熱交換パイプ「Ｕ―ポリパイ」を100m×ダブル方式５本埋め込み、地中熱利用空調システムに接続して省エネ、ＣＯ２排出量削減を図っている。また、「サーマックス」は難燃・防炎性を高めたポリイソシアヌレートフォーム（ＰＩＲ）を使った世界基準の高性能断熱材で、これを事務所棟の屋根、壁、床に使用している。

高性能断熱材のサーマックス

創エネを担う太陽光発電は当初の３倍以上に増設。設計時の１次エネルギー削減率は114％となった。これにより、100％以上の１次エネルギー消費量削減を実現する最高ランクの「ＺＥＢ」に認定。今年度の計測状況から、設計時の削減率114％を上回る数値も十分に見込めるという。建築物省エネルギー性能表示制度「ＢＥＬＳ」でも最も高い５つ星を獲得した。

グループ全社で環境負荷の低減に取り組む中、築館工場事務所棟は、数ある拠点の中でもＺＥＢ化の先導的モデルとして注目を集めている。

福島県須賀川土木事務所

再エネ開拓地として、ＺＥＢを実現

再生可能エネルギー先駆けの地を目指す福島県では、2017年５月に「再エネ・省エネ推進建築物整備方針」を策定し、建築物の再生可能エネルギー導入と省エネルギー対策に取り組んでいる。この一環として、須賀川土木事務所の改築工事でＺＥＢ化を進め、2020年３月に新庁舎が完成した。

須賀川市大町33地内に建つ新庁舎は、ＲＣ一部W造２階建て、延べ656.46㎡の施設で、設計は土田建築設計事務所、建築は渡辺建設、電気設備はニイダテック、機械設備は大塚設備が担当した。ＢＥＬＳは最高ランクの５つ星で、基準１次エネルギーから87％の消費量削減を達成し、庁舎として東北初の認証「Ｎｅａｒｌｙ　ＺＥＢ」（75％以上の１次エネルギー消費量削減を実現）を取得している。

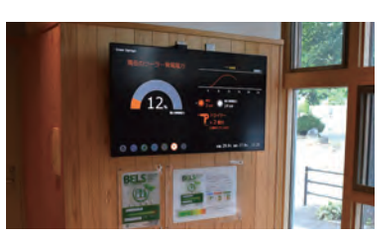
ＺＥＢ化に当たり、技術貢献している設備の一つが、地中熱を利用したヒートポンプ空調システムだ。地中70mの深さに熱交換器チューブ８本が埋設されており、夏は低温15～20℃、冬は高温10～15℃の安定した地中熱を放熱・採熱することで、施設全体の冷暖房を賄う。外気温を熱源とする空気熱源ヒートポンプエアコンと比較して、少ない電力で大きな節電効果を生み出している。

さらに、照明の節電対策として、ヨーロッパのオフィスなどで主流となっている「タスク・アンビエント照明方式」を導入した。この方法は、室内全体をアンビエント照明で控えめに照らし、必要な作業に応じて手元のタスク照明で照度を確保するもの。事務作業の中心である執務室に採用し、照明の効率化を図り省エネルギーを実現した。

執務室を照らすアンビエント照明

屋内空調の最適化や、屋根に設置した太陽光発電システム（最大発電出力20.412ｋW）の発電量測定などは、サーバー室に設置した中央監視装置「ＢＥＭＳ」で管理している。定期的に測定したデータを確認する福島県土木部営繕課の担当者によると「施設完成から１年が経過したが、１次エネルギーの実削減率は82％と計画値どおりで順調だ」と話している。

地中熱交換機のヒートポンプシステム（左）と熱交換器チューブ（右）



ＢＥＭＳで管理されたデータは玄関入り口のモニターに表示されている

建設業界のアウトドア愛好家

長引く新型コロナウイルス禍、外出や旅行の自粛ムードが続く中で、密を避けて楽しめるアウトドアがブームになっている。自然に恵まれたここ東北は、ベテランはもちろんビギナーにとってもまさに絶好のフィールドと言えるだろう。このコーナーでは、建設業界のアウトドア愛好家の皆さんを取材。誰でも楽しめるレジャーからハイレベルなアウトドアスポーツまで、多彩なアウトドアの魅力に迫る。おうち時間を満喫し尽くしたあなたも、すぐに太陽の下に飛び出したくなるかもしれない。

春夏秋冬、新鮮な青森の旬を味わえる

青森市の浅虫海岸にて

釣り

志田内海（青森市）　土木部　課長

齊藤誉享（さいとうよしたか）さん

日本海、津軽海峡、太平洋と三方を海に囲まれ、内湾に陸奥湾、さらに岩木川や高瀬川をはじめとする河川や十和田湖などの湖沼がある青森県は、豊かな自然と漁場に恵まれ、全国の釣り人にとって憧れの地と言われている。「出身は内陸だったので、すぐ近くに海があるのは良い」と話してくれたのは、志田内海（青森市）の土木部課長の齊藤誉享さん。天気が良ければ、仕事終わりでも釣りに行くほどの釣り好きだ。

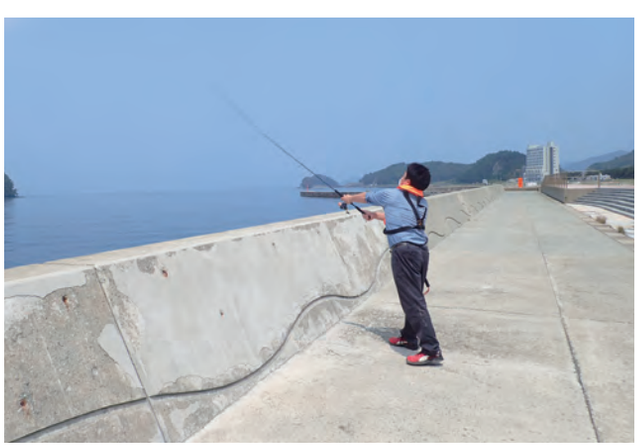
齊藤さんが釣りを始めたのは18歳のころ。当時の先輩と陸釣りに出かけたことがきっかけだった。現在は、青森市の久栗坂付近や、つがる市の日本海沿岸など県内各地に出かけ、春夏秋冬、釣りを楽しんでいるという。「釣りの一番の醍醐味は、その時の旬な魚を持ち帰って、すぐに食べられることです」と語る齊藤さんは、釣った魚を家に持ち帰り、自ら３枚に捌き、刺身や煮魚などに調理して、季節の味覚を満喫している。

取材時の６月は、初春から初夏にかけて旬とされるメバルが獲れるとのこと。夏はヒラメ、秋は青魚やイカ、冬はカレイなどが獲れると教えてくれた。今年はヒラメ釣りに挑戦したいと意気込む。

普段は一人で釣りに出かけることが多いが、年に２回ほど、同社の釣り仲間と一緒に、船を借りタイ釣りを楽しむ。ボウズになることもあるが、「陸釣りでは釣ることができない大物にも挑戦できます。それを会社の人たちと共有できるのは楽しいです」と微笑む。

この日釣れた30cmのアイナメ

また近年、県内では海流の影響や地理的な特性などから、多くの漂着物が海岸で見られ問題となっており、釣り場においても、ゴミの数は毎年のように増えている。齊藤さんは、釣りに出かけた際には、必ず落ちているゴミを拾い持ち帰るようにしているという。それは、同社の掲げる『ひとつになろう　共存できる社会を目指して』の理念からでもあると話す。「ゴミを出す人の一人ではなく、少しでもゴミを減らす人になりたい。未来の海を守るために、できることを続けたい」と語ってくれた。



マラソン

キムラ（盛岡市）取締役営業部長

大星（おおぼし）　誠（まこと）さん

仲間たちとマラソンする大星さん（左端）

自然の中で、仲間と充実した時間を楽しむ

仕事を通じた知人の誘いで岩手山に登って以来、アウトドアが趣味になったキムラ（盛岡市）の大星誠さん。今では登山のみならずトレイルランニング、マラソン、山菜採り、キャンプ、ワカサギ釣りなど一年中、自然を楽しんでいる。

そんな大星さんは、2019年10月に初めて開催された「盛岡シティマラソン」で42.195kmのフルマラソンに初挑戦。後半からのアップダウンがきつい難コースだったが見事完走。「一人では走り切れなかった。沿道からの応援に勇気をもらいゴールできた」と振り返るとともに「大人になってから応援される機会はあまりなく、『頑張れ！』の声援にパワーをもらい感動した」と話す。

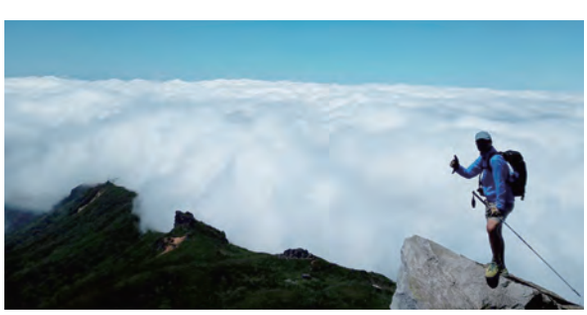
昨年は新型コロナウイルスの影響で、盛岡シティマラソンは中止に。あまりの悔しさに、大星さんは同志を募り「俺たちの盛岡シティマラソン」を主催。20kmを楽しく走った。

この仲間たちとは、これまで数々の山も登ってきた。「趣味を通して友人たちと集まることは、僕にとってとても有意義なこと。集まれることを当たり前のことと思わず大切にしている」と自然の中で共有する仲間との時間に感謝する。

「俺たちの盛岡シティマラソン」を走った仲間たち

今年は10月24日の開催が予定されている盛岡シティマラソン。大会に向け週２回ほど練習中だ。「マラソンは自分との戦い。前回の記録を超えたい」と意気込む。練習は孤独だが、日々、仲間と連絡を取り合い走行距離を確認。モチベーションアップにつなげている。「走っていると体がリラックスし、仕事に関してのひらめきもあるんですよ」と営業部長らしい一面ものぞかせる。

大星さんがアウトドアに夢中になるのは自然が好きだから。「自然と触れ合っていたい」と心底、自然を愛す。今後の目標は100kmマラソン出場や富士山などの名だたる山に登ることだという。このような趣味を持つことで、毎日が充実し仲間も増えた。「これからも気の置けない仲間と一緒に楽しんでいきたい」と日に焼けた笑顔で話してくれた。



登山も趣味の一つ。岩手山山頂から雲海を臨む

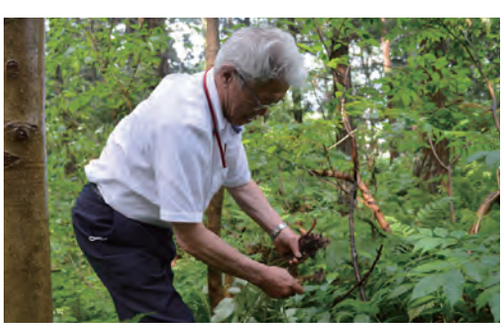
持ち山などで収穫
親戚にもおすそわけ

山菜採り

小野建設（秋田県羽後町）　社長
小野雅敏（おのまさとし）さん

竹籠は父親も使っていたもの

秋田県でも山に近い地域では、山菜を採る人は珍しくない。小野建設（秋田県羽後町）の小野雅敏社長もその一人。子どものころ、山菜採りに山に入る父親について行き、山の幸の採り方を教わった。「雪解けころのバッケ（フキノトウ）から始まってコゴミ（クサソテツ）、アイコ、ゼンマイ、ワラビ、シドケ（モミジガサ）、ミズ（ウワバミソウ）…。４月から６月ごろにかけてさまざまな種類を採ります。秋はキノコ。サワモタシ（ナラタケ）などを採るほか、ナメコやシイタケ、ヒラタケは原木で栽培もしています」。


面白いほど次々に採れる

会社の裏手にある持ち山のほか、半径10㎞圏内の山々で毎年採っており、「山菜シーズンが近づいて来て、近くに住む人が山に入っていくのを見ると、そわそわしますね」。本気で採る時は２～３時間、朝食前に採る時は、５時前に起きて１時間ほど山に入る。「春はゴルフに行ったり、近くを流れる雄物川でカヌーもしますが、週に1回は山に入りますね。雨の日の翌日はよく育つのでねらい目です」

好きな山菜料理はワラビのたたきやおひたし、タケノコと豚肉のかやき（秋田の鍋料理）など。ワラビは多い時は１回で４kgほども採る。山菜はあく抜きや皮むきなど、下ごしらえに手間がかかるものも多いが、苦にならないとのこと。食べきれない分は親戚などに分けているそうで、「採った半分くらいは人にあげているかも。お返しに自家製の野菜をもらったりしていますよ」と笑う。

キノコ栽培は持ち山で行っており、使う原木は毎年200～300本。「ナメコオーナー」を募って作業を請け負い、収穫作業に招いたりもしているが、「自然が相手なので毎年良し悪しはある」とのこと。

６月下旬に持ち山を案内していただいた。ミズは少しシーズンを過ぎたとのことだが、小野社長は雨上がりの草むらに群生するミズを次々に見つけては手折っていく。ほんの少し歩いただけで、10分もかからずに竹籠が一杯になった。手土産にと持たせていただいたミズを料理すると、サクサクした食感とすごい粘り気で、豊かな山の味を堪能できた。

根が太い立派なミズ

「山めし」や野鳥観察、楽しみ方は十人十色

登山

羽山総合建設（山形県高畠町）
技術部長　酒井正寛（さかいただひろ）さん
総務部専任調査役　飯澤和夫（いいざわかずお）さん

祝瓶山（長井市）を登る酒井さん

「登山の楽しみ方は十人十色」。それぞれ登山スタイルを教えてくれたのは羽山総合建設（山形県高畠町）の酒井正寛さんと飯澤和夫さん。二人は登山歴30年を超える大ベテランだ。

酒井さんは、登山を始めたころは週に１、２度、現在も月に１度は山を訪れる猛者で、「山めし」の達人でもある。１泊で登山に向かう際には必ずバックパックに缶ビールとジンギスカンを詰め込む。山頂で仲間にふるまうと「こんなところでジンギスカンが食べられるなんて！」と喜んでくれるそうだ。周りの見知らぬ人にもお裾分けすることで山の友達が増え、そんな交流も山登りの醍醐味の一つなのだとか。

また、酒井さんは国外でのトレッキング経験も豊富で、中国のチベットやネパールなど行き先はさまざま。特に思い出深いのが、ネパールにある世界で最もエベレストに近いホテル「ホテル・エベレスト・ビュー」からの絶景だという。標高3880m地点のホテルから眺めるヒマラヤ山脈は、世界の屋根と言われるだけあって「まさに天国のようだ」と話す。

一方、飯澤さんは「日常の便利さとのギャップ、山道の感触を求め、何をするわけでもなく山を訪れる」と登山の魅力を語る。人の気配がない山に、気の置けない友人たちと登るのが飯澤さん流の精神を整える秘訣だ。

酒井さん（左）と飯澤さん（右）

鳥好きでもある飯澤さんは、鳴き声を聞くだけで種類が分かるほど鳥に詳しく、「一番好きなのはオオタカやハヤブサなど孤高の猛禽類」とのこと。猛禽類がいるということは餌になる鳥がいて、自然が豊かである証拠。「バードウッチングを楽しみながら登る山道もまた格別」と目を輝かせる。

そんな２人に共通するのは、〝登山帰りは温泉に限る〟ということ。先にどこの温泉に行くかを決めてから、登る山を決めることもあるほどだ。「疲れと汚れを落として、思い出だけ持って帰る」。そう２人は笑顔で語ってくれた。

ホテル・エベレスト・ビューから望むエベレスト

登山帰りの温泉は格別。秋田県田沢湖高原温泉で疲れを癒やす酒井さん

最上級の絶景を追い求めて

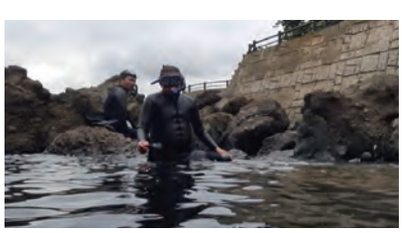
スキンダイビング SUP（サップ）

成和（宮城県松島町）
営業部　積算課・課長
橋本和幸（はしもとかずゆき）さん

SUPで四季折々の景色を堪能

月に２回程のペースでスキンダイビング（素潜り）とＳＵＰを楽しんでいるという成和（宮城県松島町）の橋本和幸さん。ＳＵＰとはスタンドアップ・パドル・ボードの略で、ボードに立ってパドルを漕ぎながら水面を移動するという近年注目のウォータースポーツだ。

初めて体験したのはおよそ３年前、スキンダイビングのインストラクターの資格を持つ同社の髙橋省一社長から誘いを受けたのがきっかけ。現場の下見を兼ねて休日に秋田県の田沢湖を訪れた時だった。潜ることに抵抗はあったものの、いざＳＵＰで湖面に出ると、初めて見る水上からの景色や湖の透明度の高さ、場所によって変わる湖の色に惹き込まれ、「初めて知る素晴らしい世界」に感動を覚えたという。一方のスキンダイビングは「全然うまくいかない」ながらも、水中世界の美しさと浮かんでいる時のリラックス効果を体感し、すっかり虜に。今では回数を重ね、少しずつ深く潜れるようになった。目標は「髙橋社長と同じくらい深いところまで」。水の中から見上げる太陽と、まだ見ぬ絶景とのコントラストにあこがれが膨らむ。


スキンダイビングは「難しいけれど大好き」に

また、ＳＵＰは海、川、湖とフィールドを選ばず誰でもトライできることが特長で、会社の同僚やその家族、友人と、体験の輪が広がっているという。ボード上で釣りやヨガをするなど楽しみ方はさまざまだが、自身は純粋にクルージングを楽しむ。山形県の白川湖で湖面と埋没林の幻想的な風景の中を進んだり、宮城県内では日本三大渓・嵯峨渓で数々の奇岩を眺めながら洞窟を通り抜けたり、大河原町の一目千本桜を横目に白石川を下ったり。中でも一番の思い出は、山形県鶴岡市で出会った日本海のダイビングポイント。「海も岩場も魚も太平洋とは異なる姿で、本当に別世界。ここは本当に日本なの？という感覚でした。生まれて初めてあんなにきれいな景色を見ましたよ」と絶賛する。

あこがれの景色

今後行きたいところは「いっぱいありすぎて語り切れません」と笑う橋本さん。最上級の絶景を求めて、好奇心・探求心がどんどん“深まって”いるようだ。

パラグライダー

福島県建設業協会　事業部技術課　技術課長
所（ところ）　秀昭（ひであき）さん

朝霧高原からのフライトで出会った富士山の絶景。右から３番目が所さん

空に憧れて、大気と一体になって

「子どものころはよく空を飛ぶ夢を見ていた。空に憧れがあったんでしょうね」と笑顔で話すのはパラグライダー歴30年以上のベテラン、福島県建設業協会の所秀昭技術課長。県ハング・パラグライディング連盟の理事も務める。

パラグライダーは、布とひもで作られた骨組みのない翼を装備し、上昇気流を利用しながらフライトを楽しむスカイスポーツの一種。

所さんとパラグライダーの出会いは、猪苗代スキー場で開催された体験飛行。「大気の流れと一体となり、飛ぶことだけに集中することでストレスがなくなる」と魅力を語る。

シーズン中は天気にもよるが月３回ほど、大概１泊２日で喜多方市の三ノ倉高原などでフライトする。上昇気流が活発になる朝10時くらいまでに機材20kgを担ぎ離陸地点まで移動し、準備を行う。フライトは１日に１～２回、飛行時間は１時間から２時間程度だ。飛行後は翌日のフライトに備え、夕食やキャンプの準備をする。

車中泊仕様にカスタムした車と所さん

夕食では、お気に入りのキャンプ道具である火力を調整できるかまどを使い、料理を飛行メンバーに振る舞う。「メンバーお気に入りのメニューは山賊焼き。かぶりつくのが良いですね」と話す。また、車中泊仕様にカスタムした車は太陽光発電やルーフボックスを装備。車内はフルフラット、バッテリー完備で快適に過ごすことができる。

お気に入りの火力を調整可能なかまど

これまでに出会った最高の景色は、気流条件により到達が難しいとされる磐梯山の山頂から裏磐梯や猪苗代湖を一望したことや、朝霧高原から飛び、高原と富士山の景色を挟んで眺めたこと。今後は、ヨーロッパでもフライトしたいと展望も語り、「ぜひ、一度体験してほしい」と話す所さん。空への憧れを抱く方はチャレンジをしてはいかがだろうか。

ふわりと風に乗る離陸の瞬間